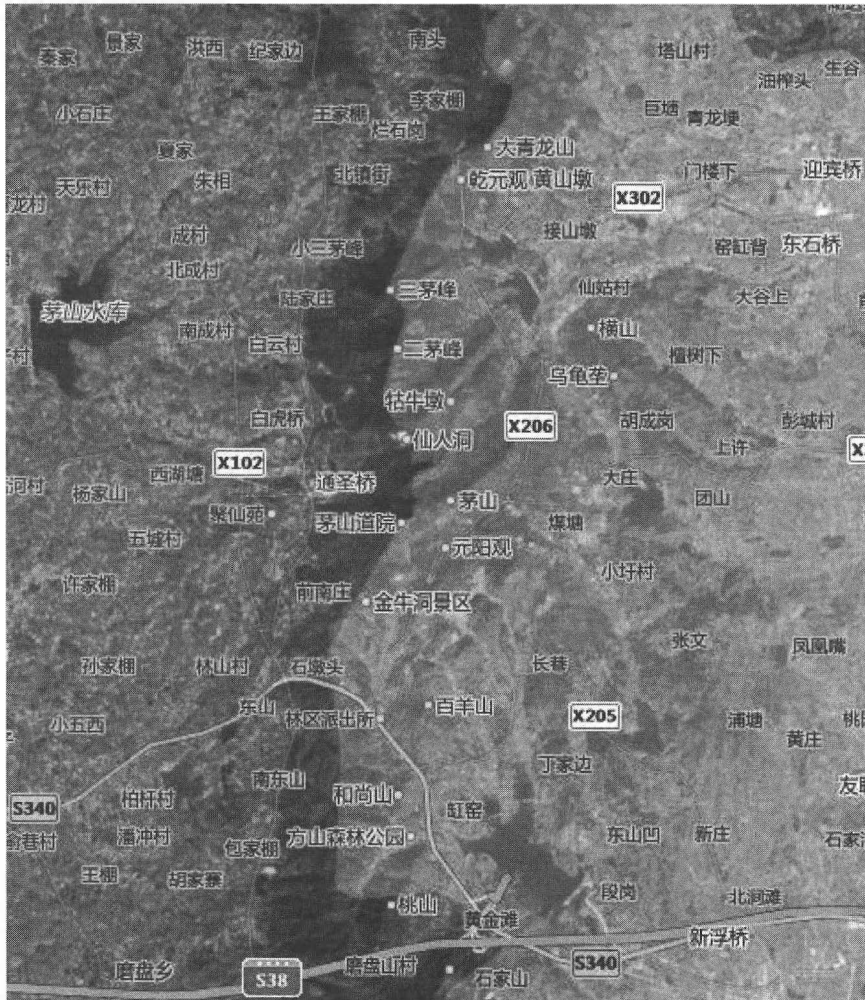


土屋昌明

本稿は2011年9月12、13日の2日間に茅山を調査した報告である。本調査の目的は、第八大洞天とされている現場の景観、それに対する現地の修行者・関係者の解釈、洞天思想にもとづいて現地を記述している『真誥』、その他の文献資料などを総合して、第八大洞天の現状に対して初歩的な考察を加えることである。

茅山は、司馬承禎のいわゆる第八大洞天である句曲山洞の所在地とされている。江蘇省南京市から東南へ太湖までの中間あたりに位置し、ほぼ南北に峰が連なっている。高さは最も高い大茅峰で海拔 372.5 メートル。乗用車で句容から入って、山の遥かふもとに入口があり、そこで入場チェックがある。入口からさらに数分走ると茅山道院に到着する。



図左上が句容、そして南京
の方向。http://baike.baidu.
com/view/80065.htm

現地の協力者は、茅山の道教のマネージメントをしている茅山道院の楊世華道長である。楊世華道長は、1964年生まれ、道号は受亨、江蘇省句容の茅山のふもとの村の出身。幼少期から茅山に親しみ、1982年に18歳で入道した。入道したときには、とくに道教に信仰心があったわけではなく、家が貧しかったため、道観に入れば勉強させてもらえると思って入道したという。当初は、道観に入って戸籍を変更できたらやめてしまおうと考えていた。しかし茅山に入ってみると、道士たちはみな高潔な高道であった。それで次第に道教への関心を深めていくことになった。1985年4月から1986年12月まで北京の白雲觀で道教を学ぶうちに、道教の深遠さを認識したという*¹。

1988年9月から句容市道教協会副会長、1992年3月から中国道教協会常務理事、1993年3月から江蘇省政治協商會議委員、鎮江市人民代表大會代表、2001年6月から江蘇省青年連合會第八屆委員會委員、2004年12月から句容市道教協会会長などの要職を歴任し、2005年から茅山道院と句容葛仙觀に住持している*²。この間、数多くの茅山の道教に関する資料集・學術論文・エッセイを発表している。また、募金などによる義捐活動もおこない、小学校の設備建設や奨学金の設置などに努めている。2002年には「茅山道院慈善基金會」を設立した*³。文化活動にも積極的で、2011年9月現在、茅山に道教博物館を建設する準備を進めているとのことであった。

楊世華道長は、洞天福地についてつぎのようなことを述べた。

「華陽洞は第八大洞天であり、しかも現在の華陽洞は洞天之なかでもっとも大きく完好である。洞天とは、単に自然環境がよいとか、美しいというだけでなく、いわゆる「気場」、すなわち修道に適した場所である。洞窟が修道に適しているのは、第一に、冷暖房のなかった古代において、夏の暑さと冬の寒さをしのぎやすく、年間で温度が一定していること、第二に、禽獸や毒蛇毒虫などに襲われず、安全性が高いこと、第三に、外界の俗氣や病氣に感染しないこと、といった要因がある。華陽洞が第八大洞天なのは、おそらく「気場」としての条件に優劣があるのだろう。第一大洞天から第十大洞天之順位は、気場の条件の順位だと思う。しかし、洞天を巡るという方法はおこなわれていない。茅山には年間で65万人が参詣し、そのうち20%は茅山道教の信徒であるが、洞天を巡ろうという信徒は少ない。自分個人としては、全国の洞天福地の連合会ないし連盟をたちあげて、洞天福地を紹介する刊行物を作り、洞天どうしの相互交流と一般信徒への普及をはかりたいと2年前から考えている。道教はほかの宗教にくらべて発展が遅れている。現在、對外開放している道観は1万カ所程度しかなく、洞天福地の民間組織を作って、相互に協力しあいながら、発展させたいと思う。天台山とは、司馬承禎の縁ですでに交流をしている。

華陽洞、玉柱洞、仙人洞のうち、玉柱洞は奥が浅いが、華陽洞と仙人洞はすでに開発して中に入ることができる。広義の洞天はある地域をいっているが、

注1…2011年9月12日本調査における楊世華道長に対するインタビューによる。以下、楊世華道長の発言の引用はすべて同じ。

注2…現在、句容市道教協会事務局は茅山元符万寧宮に置かれている。楊世華道長の個人履歴は茅山道院のホームページに詳しい。「茅山道院文化網」<http://www.msdy.org/page/15.html>

注3…楊世華・潘一德編著『茅山道教志』華中師範大学出版社、2007年、91頁。

狭義の洞天は鍾乳洞の内部のことであり、必ず洞窟がある。洞窟の中ですわったり存思・存想をしたりして修練する。そのときにもう一つの世界があらわれる。これが、洞窟の内部に洞天があるということだ。茅山から各地の名山に地下で通じているというのは、物理的にはもちろんあり得ないことだが、存思・存想の修練によって、各地の名山に至ることができるのであり、それは茅山が道教の世界で中心にあることをいっている。現在でも茅山の道士はそうした存思・内観をおこなう。これは上清派の修練方法からきている。

中国は改革開放後、経済的に非常に発展してきたが、その一方で少なからぬ困難と危機的状況が存在する。その一つは国民の素養の問題、道德観念が低い点である。宗教的な信仰心は道德観念を高めるのであり、道教はこの点に貢献できる。また道教は、生命に対する配慮と健康に対する追求をする。養生・神仙の道とは自分自身を大切にすることであり、それを人にも施すことである。さらに道教には「道法自然」「天人合一」の考えがあり、自然破壊を好まない。現在多くの困難が自然破壊からおこっている。人の寿命が短いのも、食物や自然の汚染が関係している。したがって、エコロジー問題について考えるのにも道教は貢献することができる。そして、人がかかえているいろいろな荷物をおろすよう道教は教えてくれる。荷物をおろせばリラックスして心楽しくなる。こうした道教の教えは、中国の困難だけでなく、世界の人類にも役に立つであろう。」

茅山の周囲および主要な峰のあいだには自動車道路が通っているが、個別の場所を探し出すのは、楊世華道長の説明をきいても容易ではなかった。それゆえ、以下、今回調査できた場所についてのみ叙述することとしたい。

元符万寧宮と華陽洞

茅山道院の中心は元符万寧宮である。ここは巨大な老子像が建立されていることで有名である。これは「露天道祖太上老君神像」とよばれ、積金峰の南山腹、元符宮の中央に鎮座している。高さ 33 メートルの銅製で、1998 年に落成。近くで見上げるといかにも巨大だと感じられた。しかし、あとで茅山の頂上から山並みのなかにこの老君像をみると、やはりこのくらいの大きさでないと貧弱に見えるように思われた。大茅峰に向いてやや上をみあげているように作ってある。

この元符万寧宮は、もとの元符観であり、茅山で規模が最も大きい道観であった。かつて陶弘景はここに居住した。民国時期まで多くの殿閣が伝わっていたようであるが、戦乱によって焼失した。現在では整備されて、すべての建築物が新築である。元符宮の背後の積金峰は、急傾斜ではないが、木々がこんもり



図1 老君神像

図2 老君神像（元符宮の位置）から眺めた茅山。正面の向こう側は大茅峰の九霄万福宮。大茅峰から伸びる丘陵が東側（画面左手）を通っている。画面左手前の山のこちらに面するふもとの崖に華陽洞がある。大茅峰から伸びる丘陵から分岐した丘陵が積金峰としてこの背後の東西に続いている。

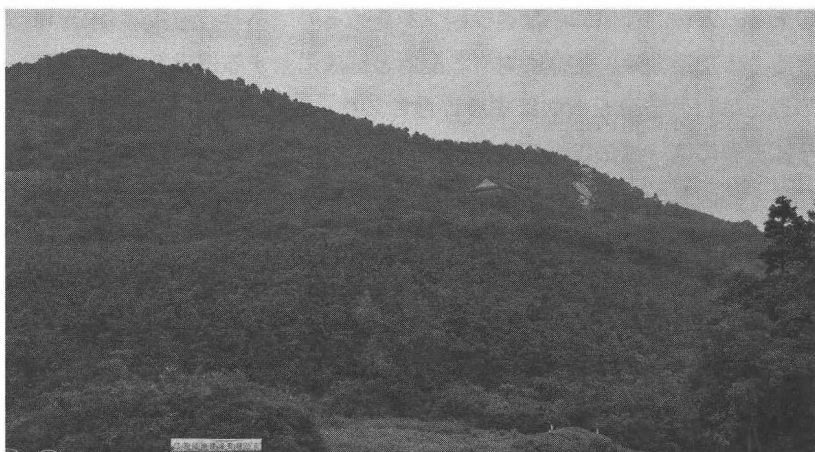


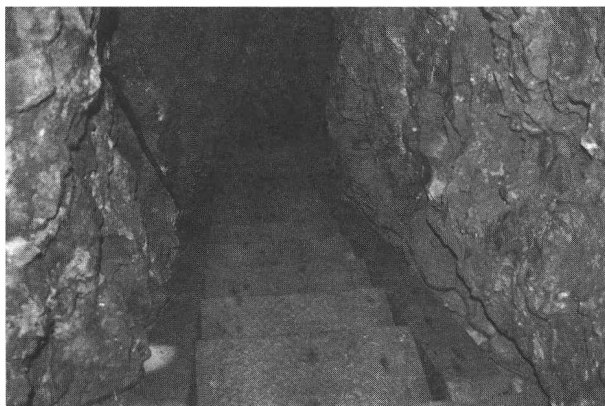
図3 積金山を西側から。中央右が老君神像。

と茂っており、ところどころに奇岩が露出していて趣深い。

元符宮から降りて300メートルほど行った崖の下に華陽洞があった。入口の崖の上に「華陽洞」と大字で刻されている。蘇軾の書だといわれているが確証はない。その周囲にも多くの摩崖書があるが、風化が激しく、一つ一つ確認することはできない。華陽洞は開発されて中にまで入れるようにしてある。ただし、今回は数日前に大雨が降り、奥が水没したとのこと。かなり危険だが、行けるところまで入ってみることにした。

崖の下への入口付近は大きく口をあけているが、階段を降りるとすぐに洞口は狭まり、夏なのに冷氣につつまれた。洞窟に入ると、洞幅は人が立ってすれ違える程度である。壁面はごつごつして、見たところ鍾乳石はない。洞壁は荒々しく掘削されたごとくで、おそらく本来の洞幅はもっと狭かったものを開発して拡張したと思われた。奥から水流の音がザアザアと聞こえてきて、非常に恐ろしい感じがした。電線が水没して電灯がつけられないため、懐中電灯の明かりを頼りにするしかないが、足下はコンクリートの階段になっていて安定している。洞窟はすぐにかんがりの勾配で下に降りていく。20メートル程度入ると洞窟は急勾配で左下に続く。右手上下に高く幅1メートル程度の岩の切

れ目があり、その奥から水流のザアザアという音が聞こえてくる。真っ暗で奥は見えないが、音の感じからして、水流は上から滝のように降り注いでいるのであろう。岩の切れ目は足下まで続いており、足下は鉄骨で橋になっている。その下には濁った水が懐中電灯の光を受けてゆらゆら揺れていた。水深は浅くない様子である。左下に続く鉄骨の階段を降りていくと、途中から洞窟は完全に水没していた。明らかに崖の内部に外部からの水が流れ込んでいるのであって、入口から浸水したわけではない。その水量も相当であることから、流れ込んでくる水流の経路が変化してない限り、華陽洞はしばしば水没したであろうことが想定される。奥の壁面は黄色で、鍾乳洞のようにみえなかった。



楊世華道長によれば、この華陽洞はかつての華陽西洞であり、歴代王朝が投龍簡をおこなった場所だということである。というのは、1986年にはじめて開発されたとき、洞中から複数の金龍や玉簡が発掘されたのである。その後、2003年からの開発で、洞窟の奥行き580メートル、深度32メートルまで開発し、翌年には、敲くと銅鐘と木魚と銅磬の音がする3個の石が発見されたという。これは、いわゆる「神鉦」ではなかろうか（後述）。楊道長の言によれば、洞窟は茅山の南の金壇市にまで至っていると信じられている。清の竺蟾光（1623～1692）編の『茅山志』、『中国道観志叢刊』第12・13巻によれば、華陽洞には東西南北に5カ所の洞口があるというので、楊世華道長はみずから探索したが、けっきょく発見できていないという。

華陽洞天のこの5カ所の洞口については、すでに『真誥』巻11「稽神枢第一」に詳しい記述がある^{*4}。

図4 華陽洞入口

図5 華陽洞内部

注4…『東方学報』第70冊、581頁（京都大学人文科学研究所、1998年3月）。以下、『真誥』の訳文と原文はこれによりつつ、趙益点校の道教典籍選刊『真誥』（中華書局、2011年9月）を参考にした。

注 5…大天之内有地中之洞天三十六所。其第八是句曲山之洞、週迴一百五十里、名曰金壇華陽之天。……句曲之洞宮有五門。南兩便門、東西便門、北大便門、凡合五便門也。

注 6…この部分、趙益（195頁）は「傳中所載、至第十天、并及鄴都、五岳、八海神仙。遠方夷狄之洞、既非此限、並不獲疏出」と句読点をきっている。これだと陶弘景がみていた『茅君伝』には、遠方夷狄の洞について書いてなかったように読める。しかし私には、この部分は、「大天之内有地中之洞天三十六所。其第八是句曲山之洞、週迴一百五十里、名曰金壇華陽之天」という地の文が、『茅君伝』からの引用であり、その引用が第八洞天のことしか述べていないことについて、陶弘景は手元の『茅君伝』と比較して補記しているように思われる。つまり陶弘景の手元の『茅君伝』には、第十洞天までの十カ所以外に、鄴都、五岳、八海の神仙や遠方の夷狄の洞天のことまで述べているのだが、『真誥』のこの部分では華陽洞天のことを述べるために、第八洞天のことだけをとりあげている、という意味ではなかろうか。おそらくここに引用した五つの門のこと、および『真誥』のこれ以下の地の文も、『茅三君伝』にもとづいているのであろう。

大宇宙の中に地中の洞天三十六箇所がある。その第八番目が句曲山の洞天であって、周囲は百五十里、金壇華陽の天と呼ばれる……（洞天の内部の説明）……句曲の洞宮には五つの門がある。南に二つの通用門、東西に各一つの通用門、そして北に大きな通用門、全部で五つの通用門である。^{*5}

この引用の前半部分に対する陶弘景のコメントには、『茅三君伝』中に記載するところは第十洞天にまで至り、あわせて羅鄴都、五岳、八海の神仙や遠方の夷狄の洞天にまで及んでいるが、ここの範囲内のことではないので、いずれも書き出すわけにはゆかない」と言っている。^{*6} この5カ所の入口について、陶弘景は実地調査をしたらしく、次のように書いている。

現在の山南の大洞窟が南側の西よりの通用門である。（南側の）東よりの通用門は柏枝隴の中にあるらしい。北良常洞は北側の大きな通用門であるが、東側と西側の通用門はともに所在がはっきりしない。中茅君のお告げに、「東通用門は中茅山の東、小茅山に続く丘のとっつきにあり、ここから入るのが洞天へ至る最短路であるが、外口はとても小さいうえに、石で塞いである」とある。この事は後に詳しく述べられており、西通用門もやはりこのような具合のはずで、今、石墳と呼びならわしている所にあるのに違いない。柏枝隴には二、三の洞窟口があるが、恐らく本当の門の外側は開かれていないのであろう。この（南面の東通用門と東西面の二通用門との）三門は清斎^{*7}して探せば自然と見つけられる。現在、南側の通用門は外側は大きく開いているが、内部はすでに塞がれている。きっと穢雑な気が多いために違いない。北面の大洞窟は今もなお鬼神が通行している……^{*8}

これによれば、5カ所の洞口は、当時、茅山の南の2カ所のうちの1カ所と北の1カ所の所在がはっきりしていたようである。

南の2カ所のうちの1カ所とは、南の洞口のうちの西よりの洞口であり、そこは洞口が大きく開いているが、内部は行き止まっている。行き止まりなのは「穢雑な気が多いため」にふさがれたと陶弘景はみている。

「穢雑な気が多い」のはなぜか。それは、茅山の南側に俗人が多く住んでいたことを意味しているのではなかろうか。陶弘景は茅山の南側の洞窟は金坑であると考え、それを掘った人たちがどこに住んでいたか検討している。「少し西の方に述墟がある。昔は朮墟という名であった。現在では良民の村である。述墟の前方十数里の大茅山には呉墟村がある」という。つまり、南便門が閉じたのは、俗人が立ち入るのをおそれて修行者がふさいだか、自然の崩落を神仙が「穢雑な気」を嫌ったと陶弘景は解釈したのであろう。

現在、大茅峰の南に金牛洞という洞窟が存在するという。それが、上述の南にある口の開いた洞口なのであろうか。今回の調査ではそれを確認できなかった。楊道長によれば、金牛洞はかつて金を採掘した金坑の跡であって華陽洞ではないという。

かつて茅山で金が採掘されたことについては、『真誥』巻11「稽神枢」に次のようにある。

山は黄金を産する。漢の靈帝の時、郡県に詔勅を下し、句曲の金を採掘して、それを武器庫に満たした。孫権の時に至り、また宿衛の人々を派遣し、金を採掘して常に官に収めさせた。隊長の家族たちはかくて伏龍の地に集住することになり、そこで金陵という村落名に変わったのである。^{*9}

これは定録君の言葉だと思われるが、これに対する陶弘景の注釈に次のようにある。

今、大茅山の南にはまだなお深く大きな穴がいくつかあり、あい伝えて金井と呼んでいる。きっと孫権の時に掘鑿したものであろう。今日、この山のすぐ東の各処にある碎石には、しばしばどれにも金の砂が見られる。^{*10}

これによれば、大茅峰の南にあった、三国時代まで採掘されていた金坑は、梁末の陶弘景のころには掘り尽くされ、もはや顧返する者もいなかったようである。ただし、孫権が金を採掘させた話は、洞庭山のこととして梁の任昉『述異記』巻下にもみえる。

洞庭山に穴が五門あり、東は林屋山に通じ、西は峨眉山に通じ、南は羅浮山に接し、北は岱岳に通じている。その東には石樓があり、樓の下には石が二つ、叩くと清越な音がする。神鉦といわれるものだ。むかし青童が蠟燭を乗って飛輪の車を走らせてここに至った。その跡はそこに残っている。その上には天帝壇山がある。山には金牛穴があり、呉の孫権の時に金を掘らせたところ、金は牛となって山に駆け上ったという。その跡も残っている。それゆえここを金牛穴という。^{*11}

これにより、五つの洞天門と孫権が金を採掘した金牛穴の話は、茅山と洞庭山でパラレルになっていることがわかる。洞天に通じている先も両者は同じであり、叩くと清越な音がする石がある点も一致している。それゆえ、金の採掘の話も洞天伝説のアイテムの一つにすぎないようにみえる。しかし、陶弘景は茅山の南麓で砂金をみたといっているし、句容県では事実、1980年代に金鉱床

注7…趙益（196頁）の校正に従う。

注8…今山南大洞即是南面之西便門。東門似在栢枝隴中。北良常洞即是北大便門、而東西並不顯。中君告云、東便門在中茅東小茅阿口、從此入至洞天最近、而外口甚小、又以石塞之。事具在後。則西便門亦當如此。正應在今所呼作石墳處也。栢枝乃有兩三洞口、恐真門外亦不開。此三門、精齋尋之、自可見爾。今南便門外雖大開、而內已被塞。當緣穢炁多故也。北大洞猶有鬼神去來。

注9…山生黄金。漢靈帝時、詔勅郡縣、採句曲之金、以充武庫。逮孫權時、又遣宿衛人、採金常輪官。兵帥百家、遂屯居伏龍之地、因改爲金陵之墟名也。

注10…今大茅山南猶有數深坑大坎、相傳呼之爲金井。當是孫權時所鑿掘也。今此山近東諸處、碎石性性皆有金砂。

注11…「洞庭山有穴五門、東通林屋、西達峨眉、南接羅浮、北連岱岳。東有石樓、樓下兩石、扣之清越、所謂神鉦者。有青童獨蠟燭飛輪之車至此。其跡存焉。上有天帝壇山。山有金牛穴。吳孫權時、令人掘金、金化為牛、走上山。其跡存焉。故號爲金牛穴。」隆慶3年（1569）序のある明の陳耀文編『天中記』巻8（藝文印書館印行類書叢編19）所引による。

注 12…地質調査総合センター『地質ニュース』1988 年 11 月号 No.411 に紹介された『中国地質報』1986 年 9 月 26 日を参照。

注 13…元の劉大彬『茅山志』巻 6、文物出版等影印『道蔵』5-586。ここでは金の採掘は秦代のこととする。

注 14…六朝隋唐の江南における金牛の伝説と鉾山の関わりについては、吉田隆英「金牛と洞穴—水中世界の禁忌と鉾山伝承—」『集刊東洋学』47、1981 年 5 月、11～22 頁を参照。

注 15…劉大彬『茅山志』巻 29、『道蔵』5-688。周文璞はハシゴを使って洞窟中に入っており、「仙牒尚可閱」と言っているところから、金坑ではなく修行地と認識しているようである。

注 16…同前『真誥』595 頁。

注 17…大茅山亦有小穴在南面、相似如一、謂之南便門。亦以石填穴口。

注 18…同前。

注 19…中茅山東有小穴。穴口纔如狗竇、劣容人入耳。愈入愈闊。外以盤石掩塞穴口、餘小穿如盂大。使山靈守衛之、此盤石亦時開發耳。謂之陰宮之阿門……得從此入、易於良常洞口。

が存在することが判明している*¹²。したがって、洞庭山はひとまず措くとしても、また孫権の時代かどうかは措くとして、茅山の金採掘は信憑性が高いように思われ、華陽洞の洞天信仰と金の産出との関連には物質的根拠があったと考えられる。

だとすると、陶弘景のころには、その地域は廃れて、人家の跡が残ったり、金採掘者たちの子孫が住んだりしていたのではなかろうか。それゆえ、茅山の南側は「穢雑な気が多い」とみられたのであろう。

陶弘景は、このように茅山の南の洞窟が金坑であることを認識しているから、上記の、洞口が開いて内部がふさがれた南便門の洞窟は、金坑とは別の洞窟であり、現在みられる金牛洞ではないとみるのが正しかろう。

陶弘景がいう「金井」は、上記の『述異記』によれば、「金牛」とあるべきなのかもしれない。「牛」は、第一画を長く書けば「井」になるので、「金牛」が「金井」に誤って伝承された可能性もある。その後、洞窟はそのまま残存し、金採掘の伝承が伝わって、金牛洞といわれたのであろう。

茅山の金牛洞では、むかし金の牛が採掘されたが、女子がそれに触れたために金牛は走り出してしまったという*¹³。それ以来、金が採れなくなったという意味なのであろう。これは、『述異記』の記述内容に加えて、この金坑の女性禁忌が表現されており、興味深い*¹⁴。宋の周文璞に「金牛穴」という詩があるので*¹⁵、宋代にはすでに金牛洞という名称がおこなわれていたようである。

南のもう 1 カ所について、『真誥』では次のようにいう*¹⁶。

大茅山にもやはり小穴が南面にあって、そっくり同じであり、南の通用門という。やはり石で穴口をふさいでいる。*¹⁷

陶弘景のこれに対するコメントによれば、これは南面の東よりの洞口である。ここで「そっくり同じ」とは、洞天の東の洞口と同じだということである。東の洞口について『真誥』は次のようにいう*¹⁸。

中茅山の東に小さな穴がある。穴の口はやっと犬くぐりほどで、人が辛うじて入れる大きさしかない。入るにつれて次第に広くなる。外側は盤石で穴の口をふさぎ、それ以外の小さな穴は盃ほどの大きさである。山の精霊にここを守らせ、この盤石も時々開くのだ。これを陰宮の阿門という……ここから入ることができれば、良常山の洞口よりも簡単である。*¹⁹

つまり、東の洞口は洞口が小さく、這いずらないと入れない程度であり、しかも大きな岩で洞口がふさがれて見いだせない。そして、南の東側の口もこれと

同様なのである。

現在、大茅峰の南には、ほかに黒虎洞と黄龍洞という天然の洞窟があるというが、楊道長によれば、それらも洞窟の状況からして、華陽洞の南門ではないという。今後の調査で確認してみたい。

北の1カ所は、良常洞といい良常山にあった。良常山と良常洞について『真誥』は次のようにいう*²⁰。

注 20…同前 590 頁。

良常山の北側の洞宮の入口は峰のところに当たっている……茅山の北側の洞窟の入口のある一山を良常山という。もともとやはり句曲山と連なっていて、同一の呼び名であった。*²¹

注 21…良常北垂洞宮口直山嶺……茅山北垂洞口一山、名良常山。本亦句曲相連、都一名耳。

つまり、この良常山は小茅峰に続いた山である。陶弘景は「北面の大洞窟は今もなお鬼神が通行している」といつている。これは陶弘景のときには洞口が開いていたことを意味するのかもしれない。楊羲の降霊をおこなった許氏の家は、この良常山の洞口の近くだったと考えられる。『真誥』巻 13「稽神枢第三」に次のようにある [677 頁]。

最近明示した静舎の場所は、これぞ金壇の郷の最上の部屋である。許長史父子でなければ、誰が住めようものか。*²²

注 22…近所標静舎地、此金郷之至室。若非許長史父子、豈得居之。

また『真誥』巻 11 には次のようにある [593 頁]。

茅山での住まいとしては、^{わたし}隠居が現在住んでいる所と南洞の入口に当たる許長史の住居とだけが、とびきりすぐれている。*²³

注 23…茅山住止、惟有隱居今所住及南洞口長史宅處、乃極好。

原文では前者は「金郷之至室」、後者は「極好」と異なる表現をしているが、両文とも許家のすまいが茅山で最高に優れた場所だといっている。そして、許家の近くには「南洞」の入口があるというのだが、南洞の近くは、前述のように金坑があって「穢雜の氣」があるのだから、茅山で最高に優れた場所とはいえない。したがって、この文の「南洞」は「北洞」の間違いではなかろうか。『真誥』巻 13によれば、許家は小茅峰の北の雷平山の西に住まっていた。また『真誥』巻 11 の次の記述によれば、その許家の所在地は良常山の西にあたる。

良常山の西南垂に住むのによい場所があり、司命君の往時の別宅があった場所である。ここも丹薬を調合するのによい。*²⁴

注 24…良常山西南垂有可住處、是司命往時別宅處也。亦可合丹。

これに対する陶弘景のコメントにこうある。

司命君は初めて長江を渡った時、ここに宅舎を立てて、親しく身を清めて神鬼と応答した。今按ずるに、「垂」という言葉の意味は、このような辺際ということだ。ここはきっと許長史の宅舎の後ろ、大横山の西に位置するのであろう。^{*25}

注 25…司命初過江、立宅於此、以自蕩滌質對神鬼。今按、垂之爲言、如是邊際。此正應在長史宅後大横之西。

だとすると、華陽洞の北口である良常洞は、良常山にあって、茅山でもっとも古く茅君の信仰が受容され、それまでの在地の山の神（鬼神）の信仰を茅君信仰が取り込んだ場所なのであろう。だからこそ茅司命君は「親しく身を清めて神鬼と応答した」のであり、陶弘景の時代にも「今もなお鬼神が通行している」というのであろう。

その洞窟がある山の西に許家は宅舎を建て、そこに茅君ほかの神々が降りたのだと考えられる。現在、華陽北洞にあたる付近には柏枝洞・三官洞・老君洞があるらしいが、詳細は未確認である。また、唐末の茅山道士である王棲霞は、当初、良常洞の前、雷平山の下に住んでいたようである。^{*26}

注 26…徐鉉「唐故道門威儀玄傳大師貞素先生王君之碑」『道家金石略』201 頁。

では、現在の華陽洞はこうした『真誥』の記述とどう関連するのだろうか。楊世華道長は、現在の華陽洞がかつての西便門だと判定している。古くは唐末と思われる金龍などの文物が華陽洞や隣接する玉柱洞から出土しているとのことなので（後述）、陶弘景は西の洞口をみいだしていないとはいえ、唐代にはここが華陽洞天の西門と認識されていたとも考えられる。元の劉大彬『茅山志』巻6も玉柱洞に隣接する華陽洞を西便門としている^{*27}。現在の華陽洞は、位置的にみて東や南や北の門ではありえない。

注 27…『道蔵』第5冊 585 頁、文物出版ほか。

陶弘景は、「大茅山と中茅山とを連ねる長い尾根の中ほどに連なった石があって、古くは積金山と呼ばれた……人が住まいするのによい場所である」というお告げをめぐって、現在の華陽洞が存在する近辺の状況を次のように述べている [593 頁]。

これは隠居が今住んでいるところの東面の横に連なる尾根のことである。この尾根はすべてきり立った石からなっており、その石の形はとてもグロテスクである……西南に大きな石壁があり、聳え立って割れ目が入っている。その内部には洞穴があり、数丈も入ると、だんだん狭まって、もう人は入れなくなるが、ひゅうひゅうと風が吹いている。その外側の数歩のところに勢いよく湧き出す泉があって、冬も夏も澄んだ水が流れ出ている。これは麓の宿房が利用するものである。山を出てすぐの谷の口に、さらにもう一つの湧きだす泉があって、勢いよく水が上にほとぼしり、冬は温かく夏は冷たい。現在では、見張所の正面から少し下ったところにまた一つの穴があって、そこから湧きだす泉はとりわけすぐれている。大水の時にもひどい旱魃の時にも、水量が増減したことがない。色はいささか白みを帯び、口当たりがよく柔ら

かであって、絶えることなく流れ出している。* 28

ここでいう「西南に大きな石壁」とは、現在の華陽洞のある崖のことをいっているようにうけとれる。また、「人は入れなくなるが、ひゅうひゅうと風が吹いている」というのは、奥が狭いながらもどこかへ続いていることを示しており、今回の調査で華陽洞の奥から水流の音が聞こえてきたのを想起させる。元の劉大彬も、この陶弘景の記述をもって華陽洞のことを指しているとみている。

現在の華陽洞は、500メートルを超える大きな洞窟であることがわかっており、後述するように、隣接する仙人洞とも関連性が考えられる。したがって、奥がふさがっていたために陶弘景は西便門と断定しなかったが、その後開発され、投龍簡の儀礼に使用されるようになった蓋然性は高いと思われる。

また、現在の華陽洞の付近には玉柱洞・仙人洞がある。このうち、玉柱洞は華陽洞に隣接しており、奥は20メートルほどで、もとは左右に小さな洞窟が並行して存在したという。この洞窟の奥は、ひゅうひゅうと風が吹き込んだり、どこかへ通じたりはしてない。これは鍾乳洞で、玉柱とされる石筍が天井と接続していたが、2004年の華陽洞の開発時に震動で断裂してしまったという* 29。

華陽洞から左手に数十メートルあがったところに仙人洞がある。これは観光開発された鍾乳洞である。内部は川が流れていて、いたるところに鍾乳石がある。洞内の高さと広さはそれほどでもないが、雨が降ったせいか水が豊かだった。鍾乳石も変化に富んでいる。洞内は三層に分かれており、下層は129メートル、中層は54メートル、上層は25メートルが開発されている。調査によると、奥は920メートルまで続いているという* 30。立ち入りできるコースの奥で、洞窟は左右に小さく分かれており、その奥から、華陽洞の奥から聞こえてきたのと同じザアザアという水流の音が聞こえてくる。この洞窟は華陽洞と一連の壁面であり、距離的にも近く、洞窟の方向も相互に接近する方向にあるから、仙人洞はこの奥で同じ水流を受けている可能性もあるのではなかろうか（楊世華道長は両者がつながっているように言っていたが、今回の調査では確認できなかった）。『真誥』や元の『茅山志』には、仙人洞に関する記述がないようであるから、ここは観光開発して外側から出入りできるように穴をあけたのであろう。人が華陽洞から入って行って、仙人洞に到達できたかはわからない。あるいは陶弘景が見張所の近くの穴から出る水のことを「色はいささか白みを帯び」と記しているのは、この仙人洞の鍾乳石を経た湧水と関係するのではあろうか。

要するに、現在の華陽洞は、陶弘景のときには西門として認定されていなかったが、その後、華陽洞天の5つの入口の西門であるとみなされるようになり、ここで道教儀礼がおこなわれるようになった。華陽洞に隣接した玉柱洞から出

注 28…此即隱居今所住東面一橫壟也。此壟純絶石、石形甚壞奇……西南有大石壁、聳而坼開。内有洞、入數丈漸峽小、不復容人、乃颼颼有風。外數步便有一湧泉、冬夏清流。即下解所資。近外澗口、又有一湧泉、水勢乃駛上者、冬温而夏冷。今正對邏前小近下、復有一穴、湧泉特奇。大水大旱、未嘗増減。色小白而甘美柔弱、灌注無窮。

注 29…前掲の楊世華・潘一德編著、273頁。

注 30…前注、273頁。

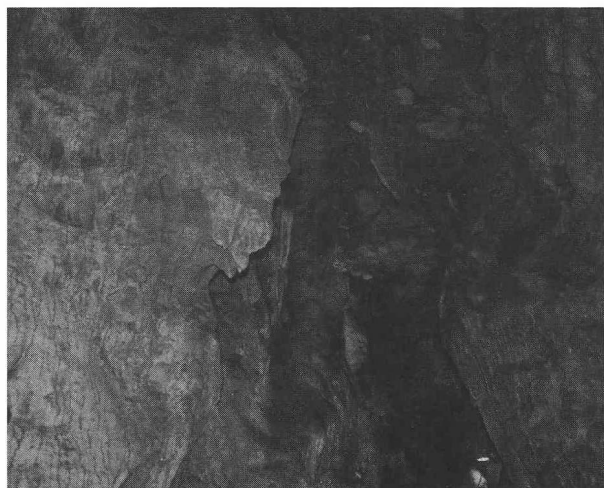


図6 仙人洞内部

土した金龍は、晩唐の製作と推定されており、もしそうだとすると、遅くとも晩唐には玉柱洞も西門に関わると考えられたことになる。現在の華陽洞は玉柱洞と隣接しており、両者は一連のものと認識されてきたとも思われる。したがって、ここでおこなわれた道教儀礼も洞天信仰にもとづいたものとみてよいだろう。『真誥』にいられていたほかの洞天入口は、現在でも明確には認識されていない。とくに北の入口の良常洞は、茅山の北の峰の一つである良常山にあり、茅山の洞天信仰の起点になったと思われる重要な地点であるが、いまみられる柏枝洞・三官洞・老君洞のいずれかがそれにあたるのかどうか、今回は調査が及ばず、考察できない。ここは許家がいた場所に近い山であり、洞口が探しやすいように思われるが、現在でも不明なのである。

九霄万福宮

九霄万福宮は大茅君峰上にあるが、入口前まで車であがることができる。本調査で赴いたときはちょうど修築中で、建築物の内部に入ることはできなかった。

ただし、奥の楼閣で大茅山上からの景観が眺められる。西北方向の山下はるかに老君像が鎮座しており、木々と山々のうねりに包まれて小さくみえる。北には少し見下ろす感じで中茅君峰があり、その肩の向こうに小茅君峰がのぞいている。山の稜線が大茅峰から中茅峰を通して、老君像の背後の積金峰や東西につながっており、いわゆる龍脈というのを感じさせられる、たいへん美しい景観である。



図7 九霄万福宮入口



図8 九霄万福宮からの眺望、中央に二茅峰、その右肩に三茅峰。

乾元観

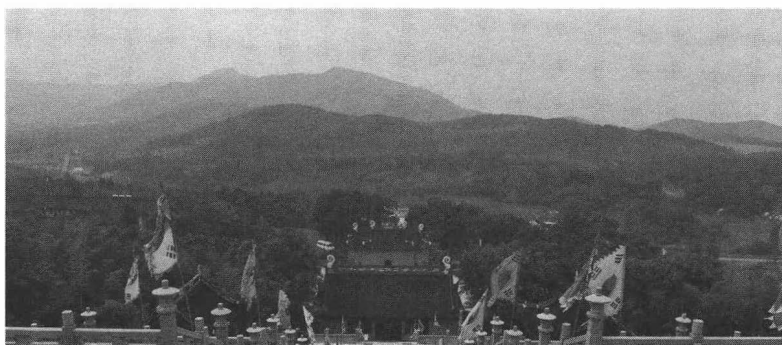
乾元観は、茅山鬱崗峰の南側で、行政的には金壇市に所属する。尹信慧道長をはじめ、女性道士が住持している。とくに、乾元観坤道経楽団が道教音楽の演奏で知られており、各地で道教音楽の理解と普及に努めているとのことである。もとの建物は戦時中に日本軍によって破壊された。当時ここは、陳毅將軍を主とする抗日軍の根拠地となったようであり、現在でもそのことは喧伝されている。ここは、北側は鬱岡山、西側は茅山の山嶺にふさがれ、南側は視界が開けているがやはり茅山が彼方をふさいでおり、東側も低い丘がだらだら続いていて、非常に奥まった位置にある。しかも鬱岡山から小茅峰に続く丘陵を越えて西側に出れば、許長史の居宅だった玉晨観のあった茅山の西側まで、それほど遠くないように見受けられた。

乾元観は、歴史的には茅山の道観として重要な役割をしていた。たとえば唐代には、玄宗と交流があった李含光が茅山にいて、天宝 11 載（752）、門人の

図9 2011年に落成したばかりの乾元観玉皇廟



図10 乾元観からの茅山



注31…顔真卿「茅山玄静先生広陵李君碑銘并序」『道家金石略』160頁。

韋景昭に鬱岡山に斎院を建てさせた^{*31}。このときの碑が、もとは玉晨観に立っていたようだが、はやくに破壊され、いまは一部が玄符万寧宮に所蔵されている（後述）。

注32…彭定求『南畝文稿』巻10。森由利亜氏はこの件を1680年ころのことと推定している。森由利亜『龍門心法』と『碧苑壇経』一詹太林と関一得における王常月への異なる視座―『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第57輯（2011年、35～52頁）。

乾元観の背後の鬱岡山には柏枝洞と老君洞があるというが、『真誥』のいう華陽洞天の北門の場所とは異なるようである。鬱岡山は標高234.7メートルあり、小茅峰の267.9メートルより若干低い、小茅峰から展望すると美しく、茅山のなかでは高い方で目につく立派な山である。そのふもとの乾元観から良常洞までは、それほど遠くなかったようである。

康熙年間のこと、乾元観に住した道士である詹維陽（字は晋柏、諱は太林）は、薬草採取のついでに良常洞天に立ち寄って、石函に『龍門心法』一帙を見いだしたという^{*32}。このことから、良常洞天は鬱岡山からそれほど離れていないところに入があると考えられていたことがわかる。具体的なことは今後の課題とせざるをえない。

小茅峰と中茅峰

小茅峰や中茅峰の山腹の竹林には野生の猿が群れており、驚かされた。調査当日は天気が悪化し、雷雲が駆けるように近づいてきて、山上で雷に打たれはしまいかと恐ろしかった。周囲は江蘇の平地がずっと開けており、茅山山上は雷の格好の標的になりそうだったのである。北に鬱岡山と乾元観が眺められ、鬱岡山からうねうねと続く稜線ごとに、茅山の西側の玉晨観があったエリアがみえそうであるが、周囲が林のため、見渡すことはできなかった。

中茅峰からの景観は、『真誥』巻11「稽神枢」の陶弘景のコメントによれば、句曲山の名称の通りだという。

今、中茅山の玄嶺に登り、前後に峰々を眺めてみると、くねくねと曲がりくねっている。大茅山からまず出発し、東へ進んで北へ転じ、さらに曲がっ



図11 小茅峰上から北東の鬱岡山とふもとの乾元観を望む



図12 中茅峰の頂上、向こうは大茅峰。

注 33…「山の形が「巳」の字に似ているので句曲という名で呼ばれるのである」という真誥に対する陶弘景のコメント。

て西へ進んで北へ転じ、また曲がって東北に進んで大横山に至る。南と北をひっくり返すと、まるで鏡文字の「巳」の字の形のようなものである。^{* 33}

中茅峰にあったという 3 つの泉は、現在、小石で囲って井戸状にしてあり、湧水が貯まっているが、落葉などに埋もれ、水も澱んで黒ずんでいた。中茅峰頂と小茅峰頂とも宮観が建設中であった。足場が非常に悪く、頂上からの景観を的確に観察・撮影することはできなかった。

玉晨観

玉晨観は許長史の旧宅に立てられた道観であった。『真誥』巻 13 には「許長史が今営んでいる家は、東面に対して小さな山があつて、雷平山という」というお告げがあり、これに対して陶弘景が次のようなコメントをしている。
[677～678 頁]

雷平山は小茅山の北にあつて、裾野が連なっている……許長史の家は壊れてしまった後、はっきりとその場所を知る者はいない。宋の初めになって、長沙景王と檀太妃が陳という姓の道士を供養し、彼のために道士の庵を雷平山の西北に建てたが、それが現今の北廨である。その後また句容山其の王文清なる者があり、後にこの庵の主となり、(三茅君の)伝記を見て、許氏がその昔ここに家を建てたことを知り、土地の古老に広く聞いた。大明七年(四六三)になって、述壚の老人の徐偶という者がおり、彼の先祖は許長史に仕えていたので、許長史の家の場所が現在の庵の前の烏柏の木のところであったことを代々伝え知っている、きっとまだ齋堂の前の井戸に残っているだろうとのことであった。当時、そのあたりは草ぼうぼうで何もかも埋もれており、王文晴がすぐに草を刈って探してみると、果たして煉瓦積み井戸が見つかったが、土がほとんど一杯に詰まっていた。そこで、きれいに掘り出してあらためて煉瓦を積んだ。今ではよい水が得られるが、水の色はやや白っぽい。これがいわゆる鳳門外の水の味に似ているという井戸なのだろうか。かくて、ここが許長史の故居であることがはっきりと分かった。これまでずっと廢墟となっていて、あえて住もうとする者はなかったのである。「金壇の郷の最上の部屋」と言っているからには、ここが「伏龍の膏腴」の地なのであろう。その西北には長い岡がずっと連なっており、長隱と呼ばれているものである。^{* 34}

これによれば、宋初に、長沙景王らが雷平山の西北に建てた庵(陶弘景当時の

注 34…雷平山在小茅北、基址相連。……長史宅自湮毀之後、無人的知處。至宋初長沙景王檀太妃供養道士姓陳、爲立道士廨於雷平西北、即是今北廨也。後又有句容山其王文清、後爲此廨主、見傳記、知許昔於此立宅。因博訪耆宿、至大明七年、有術虛老公徐偶云、其先祖伏事許長史、相傳識此宅只在今廨前烏柏樹處、應是似猶有齋堂前井存。于時草萊蕪沒。王即芟除尋繹、果得磚井、上已欲滿、仍掘治、更加甃累。今有好水、水色小白。或是所云似鳳門外水味也。於是審知是故宅從來空廢無敢居者。既云金壇至室、便爲伏龍之膏腴矣。其西北即有長岡連亘、呼爲長隱者也。

北廨)の場所が許長史の故居であった。大明七年(463)に、許長史の故宅が、陶弘景当時の庵の前の烏柏の木のところであったことが判明し、発掘・修復したのである。王文清は、雷平山の西北に許長史の故宅があったことを『茅君内伝』で知ったらしい。だとすると、王文清は『茅君内伝』をみていたのであり、『真誥』のこの部分の「許長史が今営んでいる家は、東面に対して小さな山があって、雷平山という」という文言が『茅君内伝』に載っていたことを判断できたのであろう。

許長史の故宅の井戸について、水の色がやや白っぽいことから、定録君が述べた長安の鳳門外の水の味に似ているという井戸であろうか、と陶弘景は考えている。定録君の言葉は『真誥』巻11[573頁]にみえる。

金陵の土は北邙山ならびに北谷関の土と同様に堅くしまっていて穀物に適している。そのあたりに井戸を掘れば、長安城鳳門外の井戸水の味とそっくりだ。清澄な泉源が人知れずさざ波を立てて流れ、奥深い泉水によってじわじわと潤されているからである。水の色は白っぽい。^{*35}

「じわじわと潤されている」という訳文は、「遠沽」を「遠沾」の意で訳しているようであるが、実は長安と金陵とが遠く地下の泉でつながっていることを意味するのであろう。陶弘景によれば、「鳳門」とは長安城の北門のことである。それゆえ、唐初の王遠知の記念碑である「唐國師昇眞先生王法主眞人立觀碑」に「茅山華陽は即ち三十六洞天之第八なり。峰は龍文の鼎のごとく秀で、水は鳳門の泉に叶う」とあり^{*36}、ここでは洞天の一つとして龍脈(地脈)と水脈が帝都と結びついていることをいっている。晩唐の李德裕の「寄華陽孫鍊師」という詩「何れの地ぞ最も^{いず}恹然たる、華陽第八天。松風は清くして露有り、蘿月は静かにして煙無し。^{ある}乍^ないは^な警く 瑤壇の鶴、時に^な嘶く 玉樹の蟬。千里の^{おも}戀ひを馳せんと欲さば、惟だ鳳門の泉有るのみ」でも^{*37}、千里の彼方の帝都への眷恋が鳳門の泉との関係で歌われている。^{*38}

このように、洞天思想においては、茅山の許長史居宅の跡地の井戸は、茅山と長安が地下で結びついている証拠とされた。「鳳門」は、元来は漢の長安城の北門のことであったようだが、唐代になると、唐の長安城の代名詞となり、唐の長安と茅山が地下で結びついていることを意味するようになった。

この地は、王文清が整理して以後、陶弘景のときには朱陽館が建てられ、ここで『真誥』などの編集や執筆がおこなわれたようである。元の至正十年(1350)の「玉晨観記」によると^{*39}、唐の太宗のときに華陽観となり、玄宗のときに紫陽観とされ、北宋の大中祥符初年(1008ころ)に玉晨観にあらためられたという。元の当時は、殿閣がつらなっかなりの規模だったようである。

さて、現地調査に話を戻そう。横手裕氏が玉晨観の跡地について楊世華道長

注 35…金陵之土似北邙及北谷關土、堅實而宜禾穀、掘其間作井、正似長安鳳門外井水味、是清源幽澗、洞泉遠沾耳。水色白。

注 36…「茅山華陽即三十六洞天之第八也。峰秀龍文之鼎、水叶鳳門之泉。」『茅山志』巻22、『道蔵』第5冊628頁。なお、本碑は貞観16年(642)2月25日立石とされており、この段階では茅山をまだ十大洞天説ではなく三十六洞天説で位置づけていたことがわかる。

注 37…何地最恹然、華陽第八天。松風清有露、蘿月靜無煙。乍警瑤壇鶴、時嘶玉樹蟬。欲馳千里戀、惟有鳳門泉。

注 38…傅璇琮・周建國校箋『李德裕文集校箋』河北教育出版社、2000年、471頁。詩題にある孫鍊師とは、茅山の道士孫智清のこと。『茅山志』巻11の孫智清の伝記によれば、彼は和7年(833)に茅山における禁山の徹底を上奏し、それに対して李德裕が同意している。彼らの関係については、砂山稔氏が「李德裕と道教」『隋唐道教思想史研究』(平河出版、1990年)389~415頁で詳論している。私見では、この詩で李德裕は、地下で茅山から長安につながっている泉を、浙西觀察使として茅山近くにおりながら朝廷に発言力のある自分に喩

えている、と読むこともできるのではなかろうか。

注 39… 簗蟾光『茅山志』
巻 5、『中国道観志叢刊』
第 12 巻 484 頁。

に尋ねたところ、現在の北鎮街にそのような道観があったと聞いているとのことだった。その場所は、茅山道院から茅山の西側を山沿いに北上した、小茅山の北西に位置する。その村は、かつては一つの村だった場所の真ん中を幹線道路が貫通して左右（東西）に分断されていた。東側の土地がやや高く、西側にむかって低地が開けている。このあたりはかなり湿気が強い。まず西側の村に入っていく、道観の跡地がないか聞いてまわったが、そこにはなかった。しかし、その村の田畑からふりかえると、三茅山が 3 つ並んで見える景観であることに気がついた。手前に小茅山がひかえ、その右肩の向こうに中茅山があり、はるか彼方に大茅山が見えるのである。玉晨観がこのあたりにあったのなら、3 つの山が行儀良く並ぶ姿を日々拝めたことであろう。

図 13 三茅山が並んでみえる地点



図 14 玉晨観跡地に立つ倉庫（建物は道観のものではない）



道路から山よりの東の村に入っていくところ、道観の跡地があることを村人から教えられた。現在は倉庫がたっているが、その基礎部分は道観の基礎であり、建物は日本軍に爆破されたとのことである。

爆破後、村人が道観の煉瓦を拾い集めて自宅の壁面に再利用したとのことであった。そこで、ある一軒の家をみせてもらったところ、その家の便所の壁面にそれらしき煉瓦をみいだした。漢字が鑄込まれていたが、その詳細は未詳である。

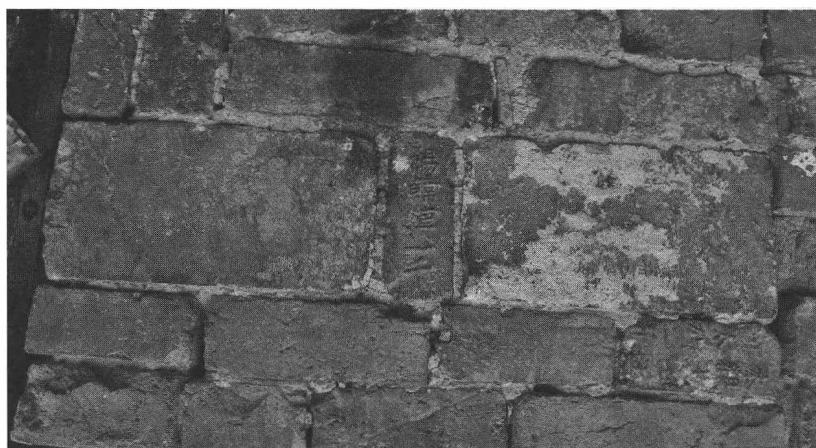


図15 村人が再利用している玉晨観のものとおぼしき煉瓦。文字がみえる。寄進者の名前と金額の記録だと思われる。このようなものは複数みかけられた。

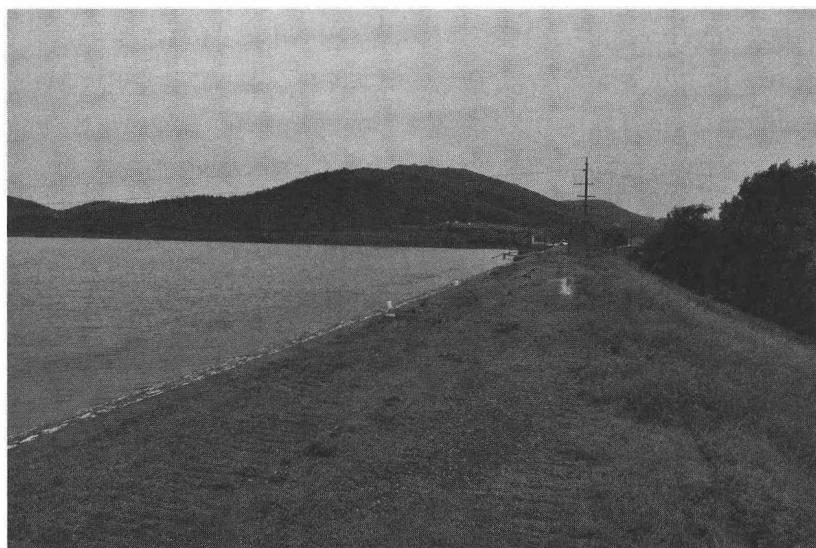


図16 玉晨観跡地から山よりは人工湖になっている。右手が玉晨観跡地。正面は雷平山か。奥の山は小茅峰。

文物

以下に、茅山に伝わったとされる関連の文物について、茅山道院ホームページにもとづいてまとめておく。

①玉印、玉圭、玉符、呵硯など

宋の崇寧年間（1102～1106）に徽宗は茅山上清派第25代宗師たる劉混康に、『上清大洞券策簡詞』十二巻軸、『上清大洞秘録』十二巻軸、『遼王詩簡』一卷、玉靶剣、玉印、玉圭、呵硯、玉符を下賜した。このうち『上清大洞券策簡詞』、『上清大洞秘録』、『遼王詩簡』、玉靶剣はすでに失われ、玉印、玉圭、呵硯、玉符が伝わっているとされる。これらは、1966年9月に文革の四旧打破運動で持ち去られ、のちに句容県文化館を経て、南京博物院に収蔵されていたが、1985年3月10日に茅山道院に返還された。

玉印は、縦 6.8 センチ、横 6.4 センチ、幅 2 センチ、印把 3.8 センチで瑞獸がデザインされており、印面は篆書陽刻で「九老仙都君印」。参詣者は香袋や腰帯に玉印を押し、消災長寿を祝すという。

玉圭は、宗壇玉圭ともいい、縦 3.4 センチ、横 7.1 センチ、幅 0.7 センチ、季節によって異なる色を呈するという。

玉符は、鎮心符ともいい、白玉質で縦 9.6 センチ、横 7.1 センチ、幅 0.6 センチ、篆書の陰刻で、「合明天帝日勅」とある。驅邪鎮宅、保命護身の効用を備えているという。

珂硯は、哈硯ともいい、白玉質で縦 9 センチ、横 4.4 センチ、高さ 1 センチ、筆を濡らせばおのずと朱色を呈するという。

②鍍金の龍

鍍金の龍は 3 種あり、1985 年に玉柱洞から出土、1 種は長さ 95 ミリ、前胸の幅 35 ミリ、足と尾は虎に似て、口は鋭く長く、鱗が小さく点じられている。他の 2 種は長さ 144 ミリ、胸部幅 5 ミリ、角があり、鱗文様があるが虎に似ている。制作年は晩唐とされている。現在は句容市博物館の所蔵。

③李玄靖（静）先生碑

顔真卿撰ならびに書、大暦 12 年(777)5 月刻の唐碑。宋の紹興丁巳年(1137)に大風で断裂、明代に落雷に遭った。清代に残存していた碑石と旧拓本をもとに模刻を建てたが、のちにまた断裂し、現在は残石 3 片のみ。元符萬寧宮の所蔵。

④宋代玉簡

長さ 23.3 センチ、幅 13.3 センチ、厚さ 1.7 センチ近く。「理宗金籙投龍玉簡詞」といい、南宋の理宗が嘉熙元年(1137)九月に大茅峰の巔表台（飛昇台）の底に埋蔵した。1985 年秋、三天門飛昇台を改修中に、台座地下 1.65 メートルにあった彫刻の施された石板の下から発見された。元の『茅山志』に記載がみられ、文字は「宏」を玉簡が「弘」に作っている以外、全く同文。いまは九霄万福宮内に所蔵。

まとめ

以上の調査と文献による考察を通して、ひとまず現地の現状をまとめておきたい。

第八大洞天句曲山洞には古来 5 カ所の洞口があるとされた。茅山の南に 2 カ所、東と西と北に 1 カ所ずつである。

- ・東の洞：小茅峰から中茅峰に続く丘陵にあるが、洞口が小さく、岩でふさがれているとされた。現在の場所は不明。

- ・南の西の洞：大茅峰の南。洞口は大きく開いているが、内部は行き止まりと

された。俗人の居住地に近い(?)。現在の金牛洞の付近と思われるが不明。

・南の東の洞：柏枝隴にあるというが、洞口が小さく、岩でふさがれているとされた。現在の黒虎洞と黄龍洞との関係は不明。

・西の洞：現在の華陽洞。内部に入ることが可能。

・北の洞：良常洞。良常山にあり、茅山でもっとも古く茅君の信仰が受容されたところ。山の西の許長史の居宅からも近い。陶弘景当時「今もなお鬼神が通行している」。現在の柏枝洞・三官洞・老君洞との関連は不明。

乾元観の背後の鬱岡山には柏枝洞と老君洞があるとされ、華陽洞天の北門とも近い。許長史の居宅に建った玉晨観は現存せず、殿舎の基礎部分と使用されていた煉瓦を確認できるのみであった。その近辺からは、三茅山の小中大峰が前後して並んでみえる。

金牛洞など茅山の南側の地区、華陽洞の内部、良常洞その他の地点の現状認識については、今後の調査を待ちたい。現地調査による認識と文献との対照研究がさらに必要である。

【謝辞】

本調査の便宜と懇切なご教示を賜った楊世華道長、ならびに茅山道院の関係者の方々に衷心の感謝を表します。また、突然の訪問者に対してもご示教を下さった乾元観の方々にも感謝致します。